

SHOW HEYシネマルーム

★★★★

アレックス

2002 (平成14) 年12月17日鑑賞

<試写会>

Data

監督: ギャスパー・ノエ

出演: モニカ・ベルッチ/ヴァンサン・カッセル/アルペール・デュボンテル

👁️👁️ みどころ

イタリアの美人女優モニカ・ベルッチに大いに期待した作品。暴力シーン、レイプシーンなど予想以上にすごい。哲学談義、セックス談義もそれなりに奥深いもの。カメラワークも独特の異色の作品。しかし見ていてしんどい……。単純にモニカ・ベルッチの美しさに酔える映画の方がいいナと思うのは私だけか……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<前評判は?>

「本作の世界初上映となった2002年のカンヌ国際映画祭では、途中退場者も目立ちながら、ラストシーンまで見た観客は惜しめない拍手をおくった。その後、全仏283館公開で3位の大ヒット、イタリア、ベルギー、スイスでも脅威の動員を記録した」とのこと。

そして、壮絶なレイプシーンが話題の、主人公の女性アレックスを演じるのは、あの『マレーナ』(2000年製作)で全世界の男性の目を釘付けにしたイタリアの女優モニカ・ベルッチ。

この2つの話題だけで、とにかく試写会が楽しみだった。

<何ともショッキングなつくり方>

映画は、冒頭オッサンが2人、ベッドに座って「哲学談義」。そして「時はすべてを破壊する」との一言が大きく字幕にもあらわれる。「こりゃ、何ともややこしそうな映画だな」という実感が脳裏をよぎる。

カメラがグルグル回り、あっちこっちに飛ぶ画面の中、レイプされたアレックス(モニ

カ・ベルッチ)の婚約者マルキユス(ヴァンサン・カッセル)が、気が狂ったかのように(本人もヤクをやっているから、半分本当に気が狂っている状態)、犯人のテニア(ジョー・プレスティア)を、ゲイクラブ「レクタム」の中で探し回るシーンが続く。危険だからそれを止め、アレックスの元へ行こうとすすめる、アレックスの元恋人でマルキユスの友人ピエール(アルバール・デュボンテル)。しかし、マルキユスはそれを聞かない。そしてやっとテニアを探しあて、「お前がテニアか!」とやりあううちに、ものすごい暴力沙汰に。ピエールは、テニア(らしき男)の顔をグシャグシャに潰してしまう。日本のヤクザ映画顔負けのすごいシーンだ。

<遂にモニカ・ベルッチ登場>

その後、いくつかのストーリーが展開され、期待のモニカ・ベルッチがはじめて姿を見せるのは、映画が始まって約30分後。それも何と、顔をグシャグシャにされ、血まみれになってタンカに乗せられた凄まじい姿。マルキユスとピエールをパーティー会場に残して、自分だけ先に出たアレックスが、レイプされ、暴行された惨めな姿だ。時系列を逆回転させながらこの映画をつくっていることが、この時点ではっきりとわかる。

パーティーでヤクをやり、子供じみた行動に走るマルキユス。これに嫌気がさしたアレックスは、ピエールの制止も振り切って、1人パーティー会場を後にした。タクシーを捕まえられなかったアレックスは、そばにいた娼婦から道を横断する地下道を教えられ、ハイヒールをはき、パーティー会場そのままの刺激的な姿で1人地下道へ。そこで女装のゲイに絡んでいた男がアレックスに目をつけた・・・。

約8分間の壮絶なレイプシーンは間違いなく映画史上に残るもの。もっともレイプとは言っても、ゲイのレイプは正常の性行為ではなく、変態的なもの・・・。つまり・・・。これ以上は言えません。

そしてさらにすごいのは、コトが終わった後、「これで終わりだと思ったら大間違いだ!お前のような金持ちのメス豚の顔を潰してやる!」と言いながら、顔をクツで蹴飛ばし、こぶしで殴り、顔面を道路に打ちつけるというすごい暴力だ。こんなシーンを天下の美女を相手にどのようにして撮っているのか私にはよく分からないが、とにかく「ものすごい!」のひとこと。

<逆回転のストーリー>

アレックスの元恋人はピエールだった。しかしピエールは何でも口に出して説明しなければ納得しない「理論」派。セックスでも解説ばかりが多かった(らしい)。だからアレックスはピエールとのセックスでは満足できなかった。

これに対してマルキユスは「動物」派。サルみたいにセックスが大好きなのだ。だから2人の仲はうまくいっているとのこと。

地下鉄の列車内での3人のセックス談義は延々と続くが、これは本当に「哲学論議」だ。そして現実にも、アレックスとマルキユスとのいかにも動物的でハッピーな性生活が描かれる。妊娠したかもしれないとマルキユスに告げるアレックスに対し、マルキユスは「悪くないな。すごくいい。」と回答。アレックスは大いに満足だ。そしてマルキユスが酒を買いに出た間にトイレに座り、尿で妊娠検査。何とも即物的なシーンだ。

こんな顔面つぶしの残虐な暴力シーンやものすごい変態的なレイプシーン、さらに女性の放尿シーンまで見せていいのかと思うくらい、カメラはきちんとして写している。一部「ボカン」もあるが、時折、あるモノもチラチラと見えるほどだ。

後でパンフレットをみると、立派な「R-18」指定だった。

<ラストシーン>

画面は変わり、公園の中。黄色のワンピースを着た肉感的なアレックスが芝生の上にゆったりと寝そべて本を読んでいる。その周囲では、何人かの女性が日光浴や昼寝を楽しみ、子供たちが楽しそうに遊び回っている。いかにも幸せそうな雰囲気だ。

そしてバックに流れる音楽は、ベートーヴェンの交響曲第7番。カメラはいろいろとアングルを変えてアレックスやその周囲を写す。音楽は次第に大きくなり、そして突然画面が消え……。ひょっとしてこれでエンド……？そう、これでエンドだった。

<この作品をどう評価するか>

前評判では、「ラスト2分の陶醉！」とある。また「本作が私たちを圧倒し、号泣させるのは何故なのか？」とある。しかし映画が終了し、ライトがついたとき、少なくとも泣いている人は1人もいなかった。逆に、そうではなく劇場空間を支配したのは一瞬の沈黙だった。この一瞬の沈黙は一体何だったのだろうか？

それは「ええー、これで終わり？」、「一体この映画は、何が言いたかったのか？」という思いだと私は思う。しかし日本人観客は上品だから、なかなかそれを表現しない。また、「自分だけが作品の良さがわからないのではないか？」という恐怖心もあるだろう。

しかし私はあえて、「こういう映画のつくり方は好きではない！」と宣言したい。ショッキングな映画であることは確か。しかし解説者がパンフで書いているほど、奥深い哲学があるとは私には思えない。むしろ、そんなに「斜め」から見ないで、もっと真正面から人間の本性や弱さ、そして恐さを描いてもらいたいと思う。

この作品の評価はきっと分かれるはずだが、私の評価はどうしても辛いものになってしまう。

せつかくのモニカ・ベルッチの美しさも十分に発揮されておらず、残念だ。

2002（平成14）年12月18日記